

住宅火災からいのちを守る10のポイント

4つの習慣

- 1 寝たばこは絶対にしない、させない。**
- 2 ストープの周りに燃えやすいものを置かない。**
- 3 こんろを使うときは、火のそばを離れない。**
- 4 コンセントはほこりを清掃し、 unnecessary プラグは抜く。**

6つの対策

- 1 火災の発生を防ぐために、ストーブやこんろ等は安全装置の付いた機器を使用する。**
- 2 火災の早期発見のために、住宅用火災警報器を定期的に点検し、10年を目安に交換する。**
- 3 火災の拡大を防ぐために、部屋を整理整頓し、寝具、衣類、カーテンは、防災品を使用する。**
- 4 火災を小さいうちに消すために、消火器等を設置し、使い方を確認しておく。**
- 5 お年寄りや身体の不自由な人は、避難経路と避難方法を常に確保し、備えておく。**
- 6 防火防災訓練への参加、戸別訪問などにより、地域ぐるみの防火対策を行う。**

住宅火災による逃げ遅れを防ぐ!

「住宅用火災警報器」の確認を

近年の住宅火災による死者の発生状況を経過別にみると、逃げ遅れが最も多く、なんと全体の約6割を占めています。また、死者の発生状況を時間帯別にみると、火災件数は起きている時間帯が多い一方で、火災死者数は就寝時間帯の方が多くなっています。

火災発生時に早期に火災を発見し、初期消火や避難を助ける住宅用火災警報器。その寿命は10年が目安です。設置から10年が経過する機器は交換し、10年未満のものは定期的に点検をしましょう。

点検方法

警報器のボタンを押す、またはひもを引いて音を確認する。



- 正常な場合** 「ピーピーピー」、「ピーピーピー火事です」、「正常です」など
※警報音はメーカーや製品により異なります。
- 電池切れの場合** 「ピッ… ピッ…」
- 故障の場合** 「ピッピッピッ… ピッピッピッ…」
※電池のコネクタが、本体にしっかり差し込まれていないと音が鳴らない場合もあります。



▲ブザー音が確認できます。

出典：一般社団法人日本火災報知機工業会



わたしたちのまちを守る! 尾道市消防局の消防職員

消防隊員は、火災等の現場で火災の鎮圧や人命救助などの危険な業務に従事しています。尾道市消防局では、消防車に乗って火災時の消火に当たる「消防隊」、救急車に乗ってけが人や病人の応急処置をして、病院に送り届ける「救急隊」、火災や事故にあった人を助け出す「救助隊」に分かれ、日々業務にあたっています。

消防隊

消防隊は、火災のときの消火活動が主な任務です。また、救急の支援にあたることもあります。火災現場は危険が多いため、防火着を着て活動しています。火災現場にいち早く到着して消火活動にあたるよう、日ごろから訓練を行い、火災をはじめとしたさまざまな災害に備えています。



▲消防車もさまざまな種類があり、15階建てビルにも対応できる、40mの長さのはしご車もあります。



消防隊長 丹羽 康太さん

火災現場、救急現場では、皆さん被災されており、普通の人では見ることのない光景に遭遇します。現場での被害を極力少なく、火災の場合はいち早く鎮火できるように、出動要請に備えて日々訓練をしています。また、隊を預かる隊長としては、出動した際、隊の皆が無事に帰ってくることができたときに、いつもほっとしています。

救急隊

救急隊は、119番の連絡が入ると救急車で現場に駆け付け、急病人や交通事故、災害によるけが人などに応急処置をしながら、病院等に搬送しています。応急処置の知識や技術を高めるため、さまざまな研修や、気管挿管、静脈路確保、薬剤投与などの高度な救急訓練に励んでいます。



▲救急車には、気管挿管、AED、心電計などの医療機器があり、車内で救命措置ができるようになっています。



救急隊長 武内 秀登さん

わたしたち救急隊は、救急救命士の資格を持ち、救急車で現場へ駆け付け、一分一秒を争う救急処置をしています。この仕事をしていてやりがいを感じるのは、心肺停止状態で救急搬送した人が、社会復帰したと連絡もらったときです。救急に関わった人から後日、手紙をもらうこともあり、とても喜びを感じます。過酷な現場に出会うことも多くありますが、この仕事をやっていて良かったと感じます。

救助隊

救助隊は、人命救助に特化した部隊です。潜水、大型車免許、ガスの溶接、クレーン操作など、救助に関するさまざまな知識や資格を持つ隊員により構成されています。火災などで建物内から逃げ遅れた人、交通事故で車の中に閉じ込められた人、海や川などでおぼれている人を救助するスペシャリストです。



▲出動時に乗る救助工作車には、救助に使うさまざまな器具が積載されています。



救助隊長 安保 亮平さん

訓練でやっていないことは現場でもできないので、水難や、山の遭難など、さまざまな状況を想定して訓練をしています。取り残された人を救助する際には、煙の中や水中など、立ち入ることが危険な場所へ行く必要があるため、知識や訓練を活かして、「これなら大丈夫」と判断して活動をしています。完璧な救助をすることは難しいですが、できる最善をその場で尽くそうと意識しています。

ONOMICHI FIRE DEPARTMENT